

『促す』

公益社団法人埼玉県診療放射線技師会
会長 小川 清



新年あけましておめでとうございます。会員の皆様におかれては明るい年をお迎えのこととお慶び申し上げます。本年も埼玉県診療放射線技師会への御支援御協力をよろしく申し上げます。

さて、社会の変化が激しい中で、医療はチーム医療というキーワードで変わりつつあります。会員の皆様におかれても、診療放射線技師として医療に貢献していくことに日夜励んでおられると思います。何事にも「よりよく」が求められ、前に進めていく姿勢が問われますが、一方で「そんなことはやらなくてよいよ」「意味がない」「言われた通りやればよいのだ」という現状維持的な意見も漂います。

今、医療関係職種は個々を高めるべく活動し、業務拡大に取り組んでいます。日本診療放射線技師会も「造影剤の血管内投与に関する業務：血管確保された静脈路からの造影剤投与、造影剤投与後の静脈路の抜針及び止血」「下部消化管検査に関する業務：肛門にカテーテルを挿入すること、カテーテルから造影剤及び空気の注入を行うこと」に加えて「画像誘導放射線治療に関する業務」としてカテーテルを挿入し、カテーテルから空気の吸引を行うことなどがチーム医療推進会議にて議論されています。当然ながら批判的、あるいは現状維持的な意見もありますが、関係医療団体は、業務拡大に向かって進んでいます。

それは「今」やらねば将来に禍根を残すからです。戦後、医療機器の進歩により我々は一見進歩的な業務についているように見えますが、実際に我々が関与されている法律は旧態依然たる状態です。平成5年に診療の補助としてMRI、超音波、眼底検査が認証されましたが、診療放射線技師の法体系は、変化がありませんでした。他の医療技術専門職においても同様であり、私たちはチーム医療協議会にて協働し、この問題に取り組んでいます。

さて表題「促す」は「実行する気になるよう勧める」または、「物事の進行を早めさせる」という意味ですが、漢字を見ると人と足で作られております。前掲した業務は診療放射線技師業務に含まれていませんが、安全性を保った状態で相当数実施されていること、医療の高度化・複雑化に伴い、多様な医療スタッフが連携・補完し合い、それぞれの専門性を発揮するチーム医療を推進するために業務を拡大するということが検討の背景にあります。関係法令の見直しや教育・研修を受けるように促すことで教育内容を担保し、実践していくことが求められます。

「促す」は組織から会員へと勧めるわけですが、職場にも当てはまります。技師長などの管理者から中堅管理者へ、中間管理職から一般診療放射線技師へと促すことが必要です。何を、何時、どのように促すのでしょうか。また若手技師は、いつも促される立場でしょうか。いや5年生は3年生を2年生は1年生を促していくことが求められます。最近のマネジメントは上からだけではなく下からのマネジメントも生まれてきましたので、2年生から5年生、主任から課長へという坂登的な「促し」も時により必要となります。職場では、仲間を助けること、ルールを守りやるべきことをきっちりこなすこと、自発的に仕事上の創意工夫をすることをメンバーに促すことが重要とされており、一人一人の診療放射線技師ができることを他人任せにせず、きっちりやり遂げていくことが「個」を高めます。

個がより高まれば、身近の諸問題がもっと見えてきます。見て見えぬふりをせず問題点を解決していくことが診療放射線技師集団というチームのチーム力が向上し、病院長のみならず他の医療関係者、そして患者さんから高い評価が得られます。さあみんなで「促そう」。

今年もよろしく申し上げます。